

池田城跡

— 主郭部発掘調査概要報告 1 —

1990年3月

池田市教育委員会

池田城跡

—主郭部発掘調査概要報告1—

1990年3月

池田市教育委員会

序 文

池田市は、猪名川が北摂山地を分断して西摂平野に出た位置にあり、その地理的条件により、古くから物資の流通や文化交流の中心地として発展してきました。このことを物語るよう、市内には遺跡、古文書、仏像などの多くの文化財が残されています。また、池田市の市街地には、全国でも数の少ない、近世のたたずまいを残す町並があり、縁豊かな五月山を含めたその景観は、落ち着いた日本古来のふるさとの感を与え、私達の心を引きとめるものがあります。

現在の発展の基盤となるこの歴史的意義の深い町並や近世に開花した文化、産業は、今からおよそ六百年前、池田氏がこの地に池田城を築いたことと深いかかわりをもつもので、また、「池田」という地名もこれからきていると言われています。

池田城跡は、町並を見下ろす東側の台地にあり、その中心である主郭部は堀や土塁が残り、戦国の世に摂津の雄として活躍し、その激動の中に消えさった池田氏を偲ぶかのように、ひっそりと静まり返っています。

池田市では、市制50周年事業として、この主郭部を購入し池田市のシンボルとし、あわせて、池田市及び周辺市町村の地域文化創造の核となるよう、城跡を活かした公園整備を実施することになりました。そのため、整備の基本資料を得る目的で、本年度から3ヶ年計画で発掘調査に着手しました。本年度は、調査面積が限られたものの、庭園跡や建物跡などの遺構が明らかとなり、池田城跡の実態を解明する上で、大きな成果があったと言えます。

最後に、この調査にあたり、各方面から色々とご尽力、ご協力を賜りました。心から厚く感謝の意を表します。

平成2年3月

池田市教育委員会

教育長 片山久男

例　　言

- 1、本書は、池田市教育委員会が平成元年度国庫補助事業（総額2,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画、実施した、池田市城山町140番地に所在する池田城跡主郭部の発掘調査概要報告である。
- 2、発掘調査および整理作業は平成元年11月15日～平成2年3月31日までの間行った。
- 3、発掘調査は池田市教育委員会教育部社会教育課文化財係が実施し、田上雅則が現地を担当した。
- 4、本書の執筆は、Ⅲの(3)を橋田正徳が、その他は田上が行い、編集も田上が行った。また、本書の作成にあたって野村大作、森本徹、下野尚豊、垣内謙治、渡辺篤、片山直久の協力を得た。
- 5、本書で使用する色調は、『新版標準土色粘』（農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修）による。また、挿図の方位は磁北を示す。
- 6、調査の進行に当たって、奈良国立文化財研究所高瀬要一氏、小野健吉氏、大阪青山短期大学助教授富田好久氏、大手前女子大学教授藤井直正氏、元豊中市教育委員会島田義明氏、大阪府教育委員会文化財保護課井藤徹氏、同課記念物係長瀬川健氏、及び関西近世考古学研究会の諸氏より御指導、御助言をいただきました。上記各位に対し深く感謝致します。

目 次

I、はじめに	1
II、調査に至る経過	2
III、調査の概要	5
(1) 土壙の構成	5
(2) 検出遺構	6
(3) 出土遺物	17
IV、まとめ	23

図 版

図版 1 (1) 主郭部遠景（西上空から）
(2) 調査前の状況（西南から）

図版 2 調査地全景

図版 3 (1) 庭園遺構（西から）
(2) 同上（西南から）

図版 4 (1) 庭園遺構（西南斜め上から）
(2) 庭園遺構背後の土層断面

図版 5 (1) 庭園遺構に伴う土壙下右列
(2) 建物 1 及び石列（南から）

図版 6 (1) 石列（西から）
(2) 碑敷面（北から）

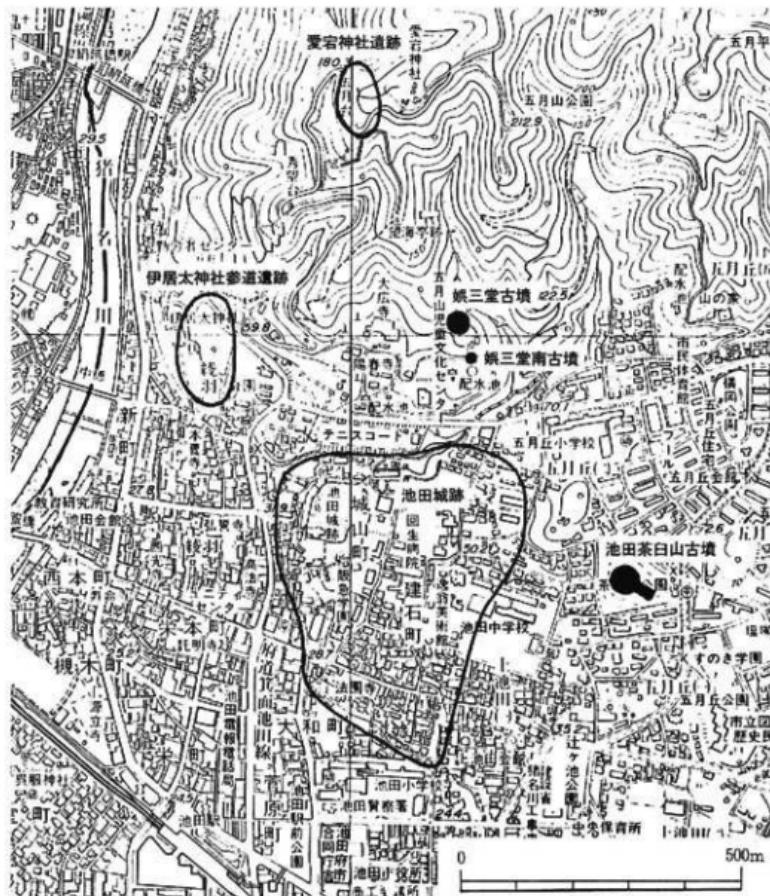
挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	1
第2図 主郭部現況図	3
第3図 調査地位置図	4
第4図 昭和43、44年調査地内土層断面図	7～8
第5図 庭園造構平・断面図	9
第6図 SX-1平面図	11
第7図 井戸平・断面図	12
第8図 石列平・断面図	14
第9図 検出造構全体図	15～16
第10図 第2層出土遺物実測図	19
第11図 第3層出土遺物実測図	20
第12図 第4層出土遺物実測図	20
第13図 銅鏡拓影図	23

I. はじめに

丹波地方の水を集めて南流する猪名川は北摂山地を刻んで大阪湾に注ぎ、西摂平野に広大な沖積扇状地を形成している。

池田市は、この猪名川が北摂山地を分断して平野部に出た位置にあり、古くから交通の要衝として発展してきた。その交通路を見ると、猪名川の水運の他、陸路として能勢街道、有馬道、余野街道、尼崎・伊丹道が集中し、更には京都と西国とを結ぶ主要幹線である西国街道が南を



第1図 周辺遺跡分布図

通過しており、京あるいは大阪、尼崎地方と能勢、丹波地方との物資集散地、あるいは文化交流の中心地としての役割を果たしてきた。

池田城跡は、こうした地理的条件をもつ池田の地に築かれた国人池田氏の居城であり、横津の政治、経済支配の拠点として室町時代から織豊期に亘って存続した。この池田城跡は、五月山塊から南方へ張り出した台地に選ばれ、背後に杉ヶ谷川によって形成された開折谷を抱え、南側および西側を台地と平野部との境界にできた段丘崖、東側を谷と堀で外郭とし、その規模は東西330m、南北550mを測る。但し、池田城跡の範囲については、旧池田村の町並をも含めた総構えの可能性もあり、必ずしも明らかではない。

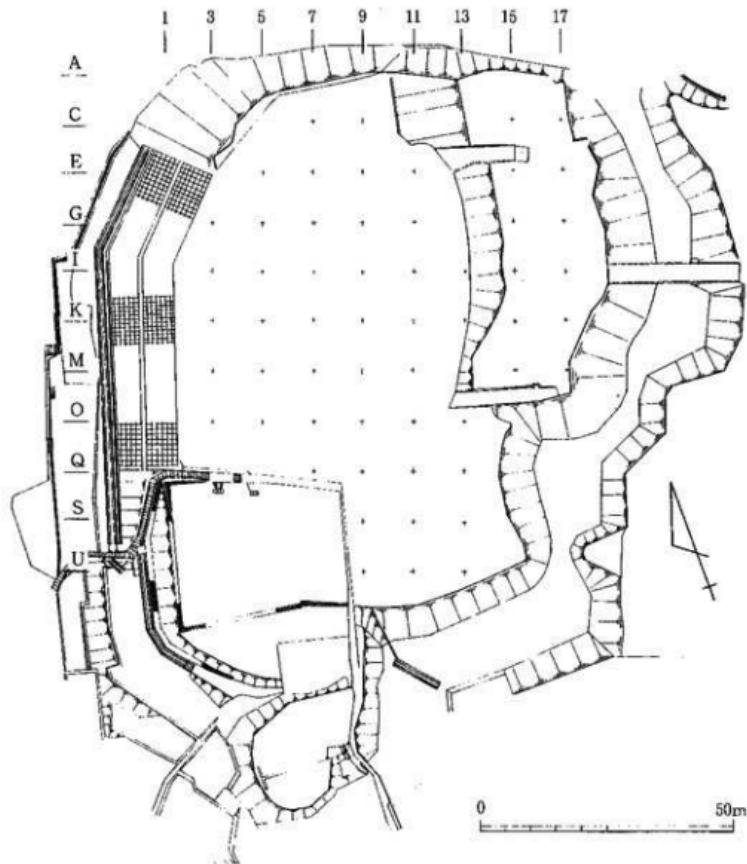
池田城跡の構造については、その大部分が宅地化され往時の姿を良好には止どめていないため明らかにできていないのが現状である。しかし、近年の発掘調査によって内堀、建物跡、あるいは曲輪に伴う整地など、徐々にではあるが池田城跡の構造を復原できる資料が整いつつある。

池田城跡の主郭部は、現在判明している城域の西北部に位置し、城郭の姿を良好に止どめている。その規模は東西80m、南北100mを有し、北側と西側は平野部との比高差約15mの岸、東側と南側は最大幅25mの幾つもの折れをもつ堀によって区切られている。また、西南部には小郭と腰郭と思われる平坦部が存在している。主郭部の東側には高さ3mの土塁が認められるが、以前、この上部に校舎があったことから、その建設に伴い土塁の上部が削平され校舎が建設できるスペースが確保されたものと考えられ、当時は相当高い土塁が築かれていたものと判断される。また、現況では認められないが、主郭部に学校があった頃の写真を見ると北側にも土塁状の高まりが認められ、本来、主郭部の東側と北側を逆L字形に土塁が築かれていたと推定される。

このように主郭部は城郭の特徴が各所に見られ、その周辺が開発によって変貌しつつある現在、城郭として認識できる唯一の場所となっている。

II. 調査に至る経過

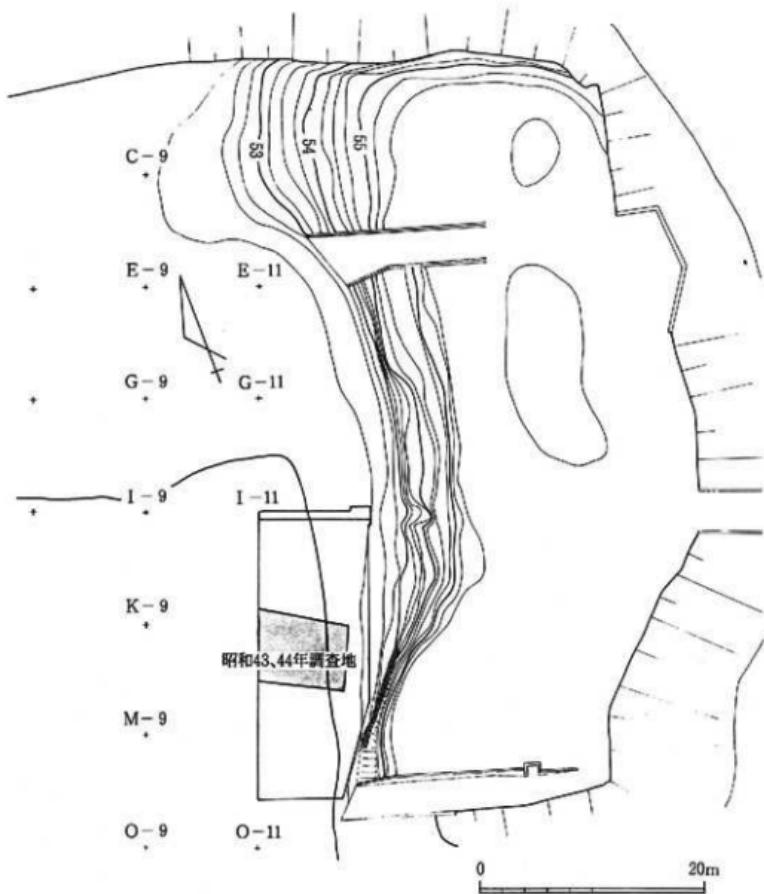
池田城跡主郭部は、戦後間もないころ大阪第二師範学校付属中学校が建設され、昭和32年に廃校されて大阪教育大学の学生寮になっていた。昭和40年代に至り建築物の老朽化に伴って鉄筋コンクリートにて替えられることになったが、本敷地は古くから池田城跡と考えられていたため寮の建て替えと池田城跡の保存とを巡り議論が交わされ、また、これを契機に林田良平氏を中心に「池田城址を護る会」が結成され、池田城跡の保存と公開が唱えられた。こうした状況の中、本敷地に池田城跡の遺構が残存しているかを確認することが保存運動の前提であるとの見解が出された。そのため、昭和43、44年に大阪教育大学により発掘調査が実施され、落城に伴う焼上、礎石をもつ主殿と考えられる建物跡群、庭園等、池田城跡の様相を具体的に示す遺構が初めて明らかにされた。この調査成果から寮の建て替えは中止され、池田城跡主郭



第2図 主郭部現況図

部は保存されることになった。しかし、「池田城址を護る会」の主張に反して、建物は解体されたにも拘らず、その後20数年間は市民が自由に立ち入りできない状態が続き、主郭部は荒廃してしまった。

池田市はその間、池田城跡が大阪府を代表する中世城郭であるとともに池田市のシンボルであるとの認識から、広く市民や広域圏の住民に開放し、地域文化の活性化の核として活用できるよう、大阪教育大学との間で池田城跡主郭部の取り扱いについて協議を重ねた。漸く、平成元年の市制50周年を迎えるに至り、この主郭部を購入して広く市民に開放できる公園として整



第3図 調査地位置図

備することが決定し、本年度内に発掘調査に着手することになった。

II. 調査の目的と方法

調査は主郭部内に営まれた遺構の性格、時期を把握し、整備計画を策定するための資料を得る目的で、平成元年度から4年度までの4ヶ年で実施する計画である。

本年度は昭和43、44年の大阪教育大学による調査で明らかにされた主殿と思われる建物跡群と庭園遺構との層位関係を把握するとともに、この建物跡群の時期を明らかにすることに主眼を置いた。このため、最終面までの調査は控え、下層の状況については旧調査区内の最終面まで掘り下げられた箇所での断面観察に止どめることにした。

調査は3ヶ年に亘り、しかも、広範囲に及ぶことから事前に主郭部全体の地区設定を行った。その方法は、主郭部西側斜面部から東側の土堀、堀の最も長い断面図が作成できる東西ラインを基線とし、起点を西北端において。この起点より、5m毎に東西ラインを西から1、2、3…、南北ラインは北からA、B、C…とし、その交点を西北杭を各地区の名称とした。

本年度の調査区はIラインの11、12ラインのI～Kまでの範囲とした。但し、後述する土壘の状況を確認するため更に南へ1m拡張した。来年度の本調査に向けて、事前にトレンチ調査により土層の状況を把握することも検討したが、昭和43、44年調査範囲が判然としなかったため、小規模ながらグリッド調査をおこなって既調査の一部を当てる方法をとった。

調査に際して、既に航空写真による現況の測量図ができていたが、堀と土壘の斜面部および平坦面のコンターが記されていなかったため、草刈後、土壘の斜面部と平坦部に25cmコンターを追加し、掘削面については時間的な関係で来年度実施することにした。

発掘調査は、まず、掘削機によって表七およびグランド土を除去し、掘削後、地区設定の杭に基づいて5mメッシュの杭を打ち、今回新たに発掘調査する箇所は5mグリッドによって実施した。また、旧調査地については埋土を除去し、その範囲に沿って土層観察用に畦を設けた。なお、各グリッドの名称は上述したとおりであり、出土遺物はこれに基づいて取り上げた。

III. 調査の概要

(1) 土層の構成

本年度の調査地における土層の構成は、小規模な範囲内で観察したため主郭部内全域の基本層序にまで言及できるかは明らかでない。特に、西側の土壘下付近では複雑な層序を示しており、これについては上巻の項目で触れることとし、昭和43、44年調査地の壁面での所見を述べることにする。

層序は基本的に8層からなる。第1層は暗灰黄色砂質上で、染付や寛永通宝等を含む近世以前の層である。第2層は厚さ5cmの炭を若干含む黄色粘質土および砂質土の整地上で、部分的

に炭を含まない褐色粘質土が見られる。この層中には2次焼成を受けた瓦や土器皿が多量に含まれている。第3層は灰黄褐色砂質土および黄褐色粘質土で厚さは3~10cmを測る。主として確認した遺構面Ⅱの整地土であるが、本調査地の西側では認められない。尚、この整地土の上面には部分的に炭面が広がっている。第4層は黒灰色砂質土で、炭を多量に含んでいる。この面から掘えられた礎石が認められることから、第4層の上面に生活面が存在する。厚さは20cmに達するところもあり、火災に伴って大規模な地均しが行われた層と考えられる。第5層は黄褐色砂質土で、後述する庭園遺構の石材はこの面で掘え置きの掘り方が認められる。第6層は炭層で焼土粒を少量含み、第7層は厚さ15cmの焼土層である。第8層は黄褐色砂礫土の地山で、この上面には厚さ2~3cmの炭が広がっている。

今回の調査区において確認できた遺構面は5面を数える。上述した内容と重複するが、ここで、土層の堆積状況から遺構面の推移を簡単に述べておく。

まず、最初に営まれる遺構面は地山面である。旧地形から判断するのは困難であるが、現況から見て、平坦面を造り出す際、大規模に掘削が行われたものと推定され、整地土に弥生土器が含まれるため掘削により弥生時代の遺構も相当破壊されたものと考えられる。この地山面に営まれた遺構は、その上面に広がる炭から火災を受けていることが認められ、第6層の焼上、炭を多量に含む黒褐色粘質土で覆われている。2番目の遺構面は、第6層の上面を薄く整地して営まれており、後述する庭園遺構はこの面で造られている。3番目の遺構面は、第4層の炭を多量に含む暗茶褐色砂礫土で庭園遺構を埋めた後に見られ、一部であるがこの面より掘り込まれた礎石が認められる。4番目は第4層の上を3~10cmほどの整地を施した面でみられ、後述する躰物跡群もこの面に存在する。この遺構面を整地して5番目の遺構面が存在し、今回の調査で上杭と集石遺構を確認した。

以上のように、今回の調査地で確認した遺構面は5面であるが、遺構面Ⅰ以外はその上面には炭面がひろがっており、火災を契機に地均しや整地が行われたことが判る。なかでも2回目と3回目の地均しは特に厚いものでそれぞれに庭園の造園と破棄がみられ、城郭全体を改変させ得る大きな画期が2度あったことを物語るものと考えられる。

尚、前にも述べたが、上層の構成は旧調査地の壁面での観察であり、また、それぞれの上層において遺構の有無を平面で確認した訳ではないため、遺構面の数については検討の余地が残る。

(2) 検出遺構

本調査は公園整備に伴う事前調査という性格上、池田城跡に係る最上而の遺構検出に止どめることにした。但し、遺構面Ⅰが池田城跡のものであるから判然としなかったため、遺構面Ⅱまで下げた。

a. 庭園遺構

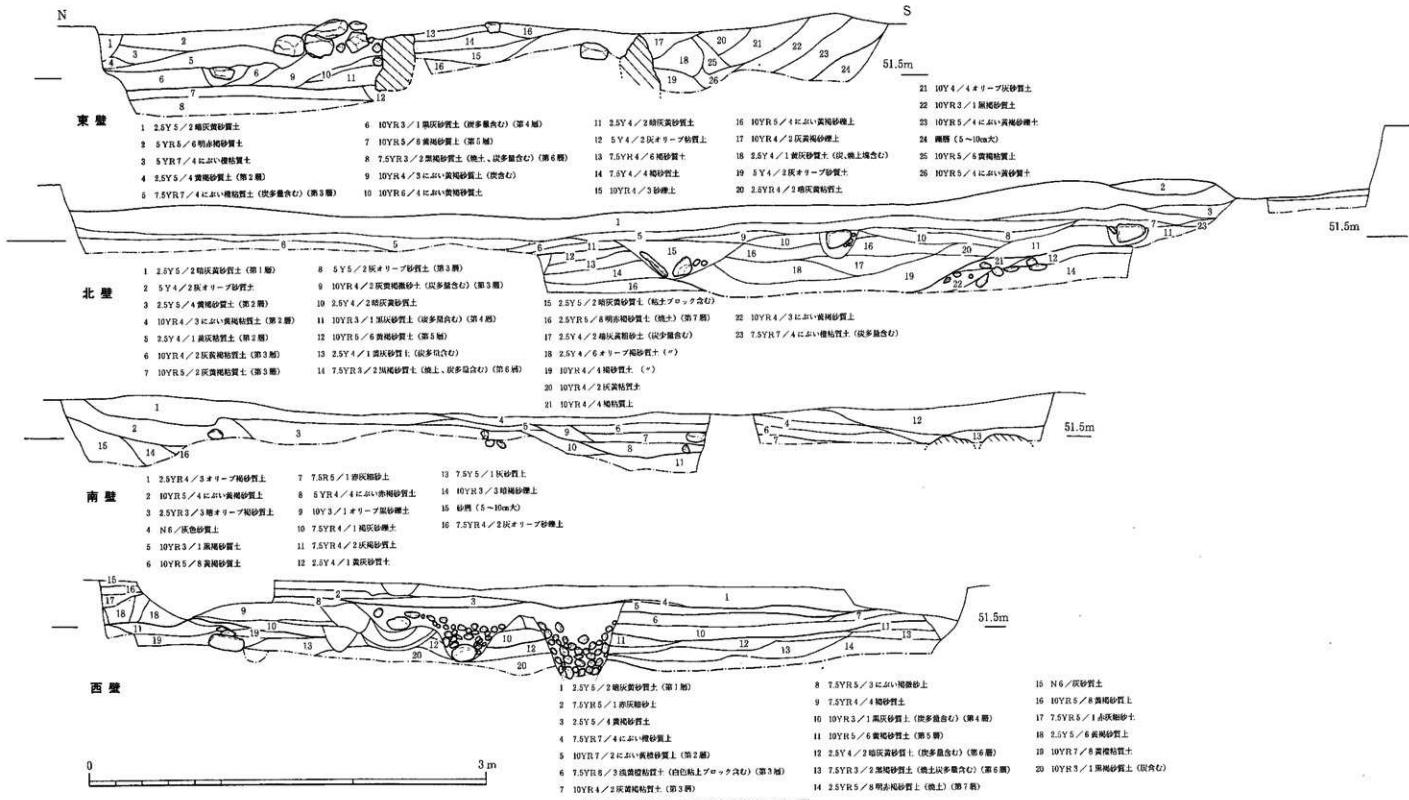
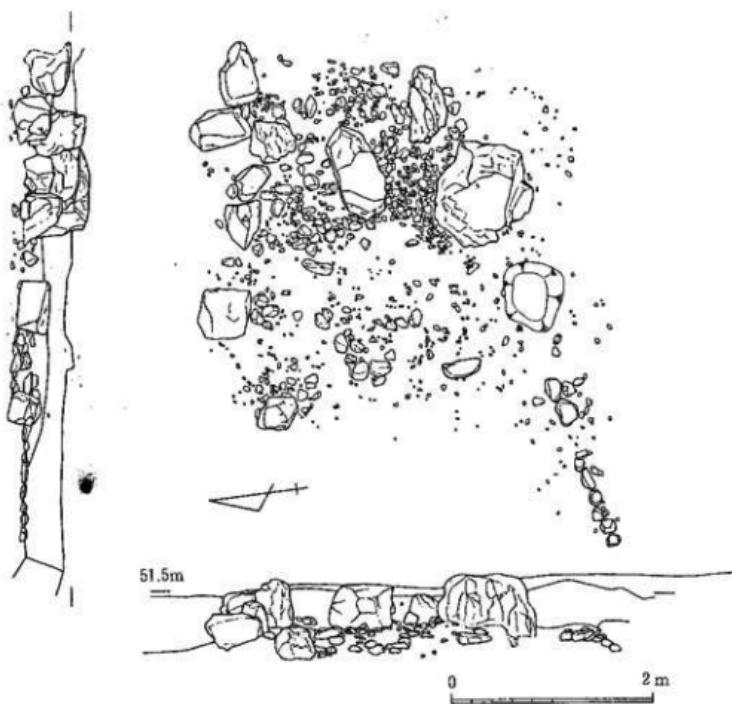


図4 国昭和43・44年調査地内土層断面図



第5図 庭園造構平・立面図

昭和43、44年の調査によって確認されたもので、今回再度検出した。

大振りの立石と5~10cm大の円礫によって構成されているが、既に庭園造構面の大部分は失われている。また、一部しか検出されていないため全容は不明であり、更に東北部へ伸びている。大振りの立石の配し方をみると、大きめの石材を後方に等間隔に置き、その西北側にはやや小さめの石材を高低をつけて並べており、庭園の正面と考えられる西北側から見ると、岩の遠近感をなるべく少なくして屹立する姿を石材の大きさや高低によって表現するという意匠が窺える。これらの石材は築山状の高まりを施した上に配されているように見受けられるが、その構築方法をみると、まず、一旦整地によって平坦面を形成し、この整地を掘り込んで石材を立てている。その後、石材の下半部を埋めながら高まりをつけ、石材の間隙に5~10cm大の円礫を不規則に敷いている。この築山状の高まりの平面形は、上述したように庭園の構築された

面の大部分が失われているため判然としないが、恐らく西北部が最も張り出すように曲線を描いているものと判断される。また、旧調査地断面を観察すると、築山状の高まりの西北部では庭園構築面が穏やかに下がり、その縁部には5cm大の礫が、下がる面に沿って認められる。このことから、築山状の高まりの前面には池状の窪が存在していたと思われる。しかし、この池状の窪と思われる箇所の土層断面から、水が張られていたと考えられる明瞭な痕跡は認められない。(実際、主郭部は周りを堀と自然の岸によって囲繞されているため、水を導水することは不可能と考えられる)。

この庭園は、土層の構成でも述べたように地山上に焼土層および炭層が堆積した後、整地を行って構築されたもので、旧調査地東断面をみると立石の下に炭層が続いている。また、庭園東南隅の最も大形の立石と土層との関係を見ると、南側上方へ立ち上がる黒褐色砂質土が堆積した上に据えられている。更にこの黒褐色砂質土の南側の上層も、土壌の改修を示すように南上方へ立ち上がる堆積をしている。このことから、既に築かれていた土壌の幅を広げ、これを背後にして庭園を築造したことが判る。また、旧調査地南端に見られる石列も上述した黒褐色砂質土が堆積した後に据えられており、庭園が造られた段階では土壌下端に石列が設けられていることが判る。

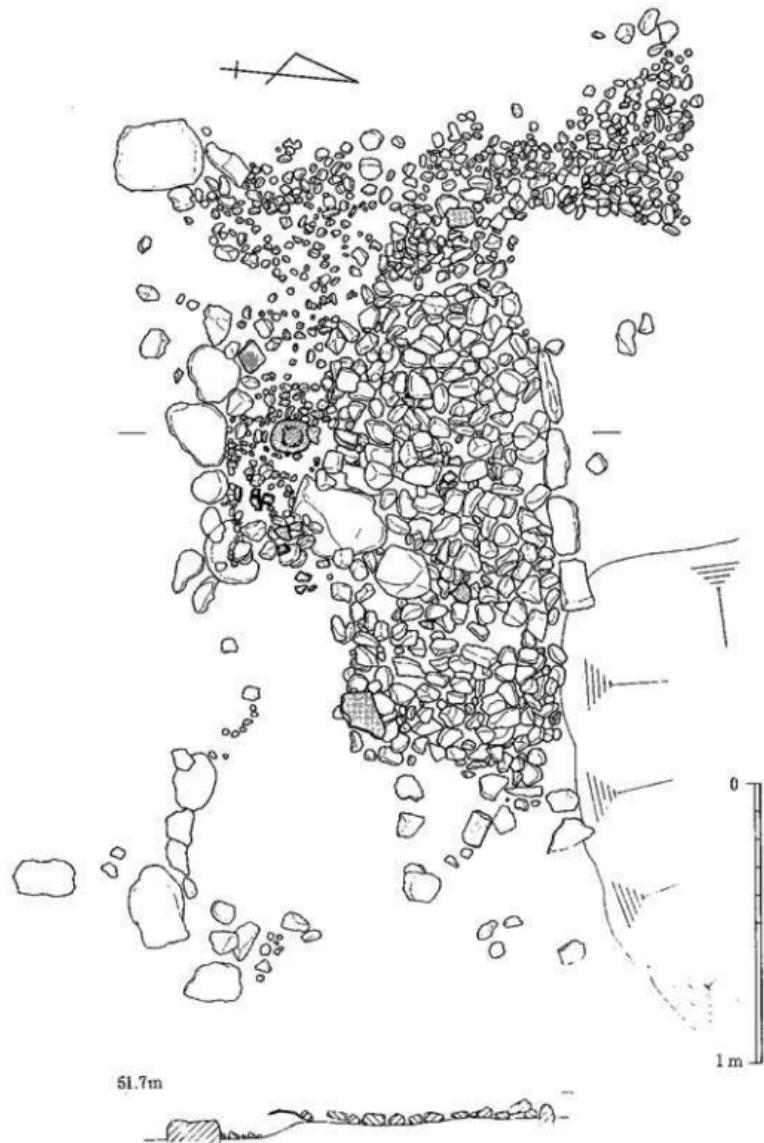
b. 造構面II

建物跡1 昭和43、44年の調査において主殿と考えられる総柱の建物跡群が確認されており、今回の調査でその一部を再度検出した。

この建物跡は礎石を伴うもので、礎石は20cmのものから30cmのものまであり、使用されている石材の大きさは不規則である。残存する礎石列の東側に礎石が抜き取られたと思われる、深さ5cmほどの浅いピットがあり、さらに東へ1分間伸びている。その主軸はN-5°-Eにあり、ほぼ真北に向いている。礎石の間隔は50cmの箇所と90cmの箇所があり、その上部は複雑な構造をしていたものと思われる。礎石は第3層の整地土が施された後に、礎石がようやく入る大きさの掘り方を設けて据えられており、石材の中には上面が平坦でないものもある。また、1点ではあるが石造物の一端(五輪塔か)と思われるものがある。

礎敷面 調査区東北部において検出したものである。概ね3~5cm大の円礫を密に敷き詰めており、その範囲は東西2.8m、南北6.5mを測る。東側が攪乱によって失われているが、東側の辛うじて残存している箇所では礫がなくなっている、恐らく、この礎敷面は調査区内に収まるものと考えられる。上面には炭が一面に広がり、また、若干の土師器皿等の遺物が出土した。

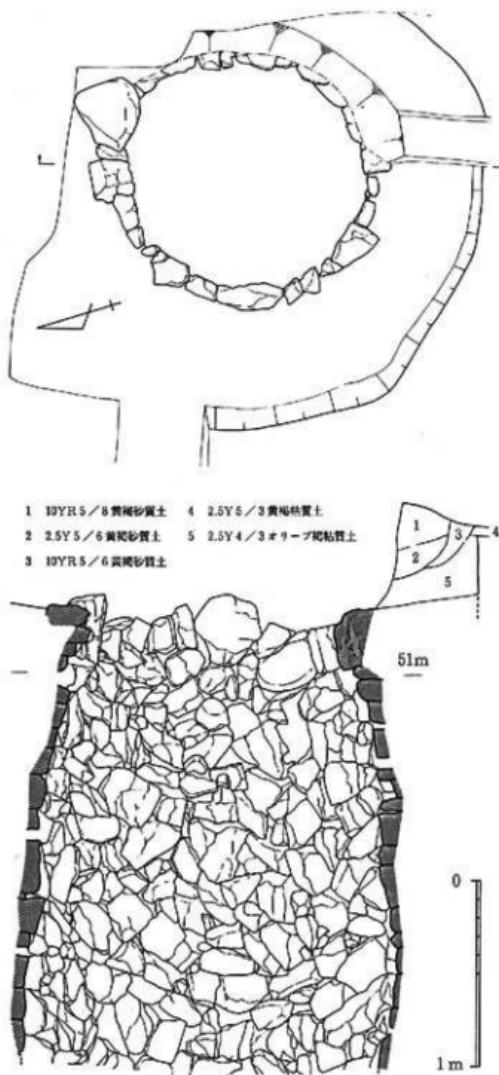
礎敷面の東南部には10~20m大のやや大きめの円礫による集石遺構(SX-1)がある。この遺構を詳細に見ると、礎敷面が施された後に設けられており、その北辺は石材を一列に並べ、南辺には礎石と思われる25cm~30cm大の石材を用いた石列がN-6°-Eの方向に据えられている。また、この礎石と思われる石列に相対するように礎敷面の北辺に接して、礎石とそ



第6図 SX-1平・立面図

の抜き取りと考えられるピットが見られ、西辺にも1点ではあるが礎石と思われる石材がある。これらの礎石と思われる石材の位置をみると礎敷面を取り囲むように据えられており、内部床面に礎を敷く建物と考えられる。但し、西北部では建物とした場合その範囲の外側にも礎が広がるが、他と比べて疎らで、しかも若干高低差があるため、流れ出したものと思われる。尚、後述する井戸が東北隅に接しているため、この建物は井戸に開わるものと推定される。

井戸 調査区東北隅で検出した円形石組井戸である。上部の内径は1.35mを測るが、深さについては検出面から3mまで埋土を除去したが降雨により石材が一部転落したため中止した。掘り方は北側が昭和43、44年の調査によって一部失われ、また、東側は調査区外へ伸びているが、確認できた部分から約2.5mの円形を呈するものと推定される。機械掘削時にその箇所に腐食土が認められ、これを除去して井戸であることが判明し、また、埋土内にはガラス片が含まれていたため学校建設直



第7図 井戸平・立面図

前まで開口していたことが判る。掘り方は第3層の炭層上面から見られるが、この箇所では第2次遺構面に伴う整地上が存在していないため、第3次遺構面で構築された可能性もある。掘り方断面を観察すると、上層から再度掘削されており、池田城跡存続時に設けられたものが、廃城以後も井桁を造り替えて使用されていたと判断される。石組には裏込め石は認められないが、井戸の径に比して30cm人のやや小さめの石材を主に用いて密に組んでおり、精密な感を与える。現状で捉えられる断面形態は袋状を呈し、上部と下部の径は約40cmの差がある。

c. 遺構面 I

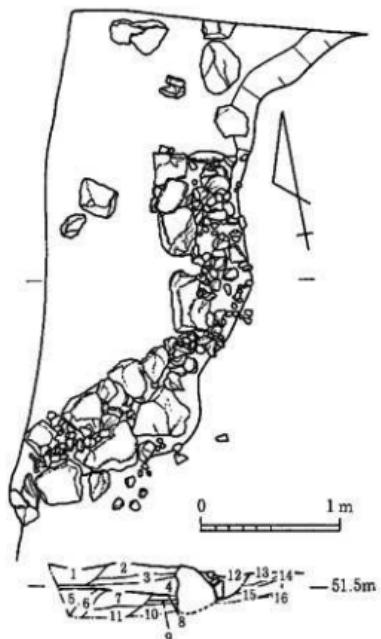
土杭（SK-4）、集石遺構（SX-2）があり、本調査内では建物跡は認められなかった。SK-4は北側半分を昭和43、44年の調査によって失われている。よってその規模については不明である。断面および旧調査内に杭が認められたため北方へ伸びているものと考えられるが、その性格については明らかにできない。また出土遺物も少量であり時期についても判然としない。

SX-2は昭和43、44年調査地内で検出したもので、東半分は失われている。その断面をみると、深さ50cmを測り、後述する庭園検出区域内にもその下部が辛うじて残存しており、構造の細長いものと考えられる。この遺構に見られる礫は10cm大のものを疊らに詰め、その間には砂質上がみられることから、暗渠であった可能性がある。出土遺物はみられない。尚、遺構面には炭が一部みられる。

d. 土壘

上述したように、旧調査地の東断面において南上方へ斜めに立ち上がる土層が認められることがから、土壘か西側に張り出していたことが判明した。現状では土壘は主郭部東側のみ残り、堀が大きな折れを有する箇所から南側には全くその痕跡さえ認められない。このことから、本来上層は堀が大きな折れを有する箇所から西側へ屈曲して伸び、主郭部内を走っていたものと考えられる。しかし、遺構面IIでの十星は既調査によって残存する土壘に続く箇所が失われている。また、土壘の大部分は調査区外へ伸びており、平面形や主殿と思われる建物群との位置関係については来年度の調査によって明らかにできるものと考える。この土壘は一部分確認したにすぎないため、時期的な変遷については詳らかにできないが、庭園の項でも述べたようにその築造に伴って十星の幅が広げられていることが判明している。また、土壘の内側は、庭園の築造された段階ではその下端に石列を、遺構面IIでは石垣の基底部と思われる石列を確認した。

この遺構面IIの石列は石材が小ぶりであることから腰巻き土塁の石垣と思われ、十星の上部が後世の削平によって失われ、辛うじて石垣の下部が残存したものと考えられる。このことを証するようにその上部に据えられていたと思われる石材が若干主郭部の内方向に転落していた。この石列は残存する十星が西方へ伸び南方に屈曲する所から40cm離して設けられており、1.3mの箇所でさらに西方へ60度の角度で屈曲している。その構築は、土壘が南方へ屈曲する箇所では十星を築いた下端から約40cm離して石材を据え、その間には裏込めと考えられる10cm人の

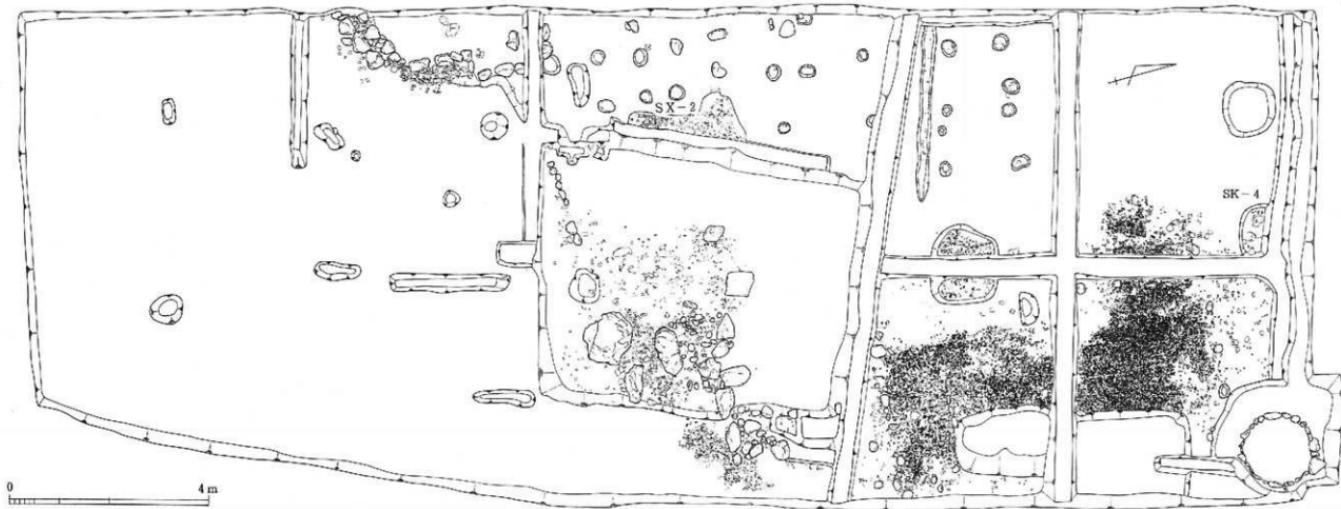


- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1 7.SYR4 / 6 岩砂質土 | 9 10GY4 / 1 岩絆灰岩砂土 |
| 2 7.SYR8 / 1 岩灰砂質土 | 10 7.SYR4 / 3 岩砂質土 |
| 3 7.SYR5 / 1 岩灰砂質土 | 11 7.5Y4 / 6 岩砂質土 |
| 4 10YR4 / 4 岩砂質土 | 12 10YR4 / 4 岩砂質土 |
| 5 10YR3 / 3 岩細砂質土 | 13 10YR4 / 4 岩砂質土 |
| 6 10YR4 / 6 岩粘質土 | 14 10YR6 / 6 岩黄褐色砂土 |
| 7 N5 / 灰褐色砂質土 | 15 2.5Y4 / 3 オリーブ岩砂質土 |
| 8 5YR4 / 4 にい赤褐色砂質土 | 16 2.5Y4 / 6 オリーブ岩砂質土 |

角砾を詰めている。また、石列が西方に屈曲する箇所はやや急入りに組まれておらず、土壌下端に接して石材を据えて更に30cm離して石材を据え、その間に裏込めと考えられる角砾を詰めている。尚、土壌が南方へ屈曲する箇所では裏込めと考えられる角砾が側面から覆うように据えられており、ここで石垣が途切れているものと思われる。しかし、残存する土壌の下に位置する調査区東端で石列とほぼ同じ大きさの石材と角砾が認められ、残存する土壌付近に石垣が設けられていた可能性があるが、石垣が一旦途切れることの明確な理由が見いだせず、現段階では石垣の状況については明らかにできない。今後の土壌の断ち割りによる調査によって明らかにできるものと考える。

石垣の構築面は造構面Ⅱの整地土下でみられるため、造構面Ⅲの段階で既に構築されていた可能性がある。

第8図 石列平・断面図



第9図 検出建物全体図

(3) 出土遺物

本年度の調査のうち新たに一定面積の調査を行ったのは遺構面Ⅰおよび遺構面Ⅱであったため、第3層までの遺物と掘り過ぎに伴う第4層の遺物が若干出土したに過ぎない。しかし、これにより下層については既調査地内の調査であり遺物については明らかでない。

出土遺物は上師器皿、瓦質土器、陶器、磁器、瓦、古銭などである。このうち、上師器皿の出土量は格段に多く、その形態は多様である。そこで、上師器皿の形態分類を行った上で各上層ごとに出土遺物を検討する。

1) 土師器皿の形態分類

上師器皿は、口径により大皿、中皿、小皿に分けられる。大皿は、口径が12cm以上のもの、中皿は10cm以上、12cm未満のもの、小皿は10cm未満のものとした。これらの器種は、更に口縁部、体部、底部の形態により細分される。これらの形態分類は以下のようになる。

大皿

大皿は底部が平坦で、体部が逆「ハ」の字形に開く。体部、口縁部の形態によりA₁～A₆に分類される。

A₁：体部は直線的に立ち上がる。口縁部は肥厚し、端部は内面に面をもつ。

A₂：体部は直線的に立ち上がる。口縁部は肥厚しないが、端部は内面に面をもつ。

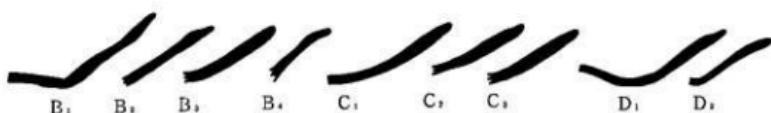
大皿A類



中皿B類

中皿C類

中皿D類



小皿E類

小皿F類

小皿G類



第1表 土師器皿分類表

A: 体部は直線的に立ち上がりが、口縁部は外反する。口縁部は肥厚する。

A: 体部は内弯きみに立ち上がる。口縁部は外反する。

A: 体部は内弯きみに立ち上がる。口縁部は大きく外反する。

A: 体部は内弯きみに立ち上がる。器壁は厚い。また、A₁からA₃に比べて調整が粗雑である。外面下半部には指頭圧痕が明瞭に残る。

中皿

中皿は、底部の形態からB～Dに三分類され、更に体部、口縁部の形態から細分される。

B類：底部が平坦で、体部は逆「ハ」字形に開く。

B: 体部はやや外反きみに立ち上がり、口縁部は肥厚しない。

B: 体部は直線的に立ち上がる。口縁部は肥厚し、端部は内面に面をもつ。

B: 体部は直線的に立ち上がる。

B: 体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は外反する。

C類：底部は丸味を帯び、体部はやや内弯する。体部との境界は明瞭でない。口縁部の形態から二つに細分される。

C: 口縁端部がやや外反し、その内面には凹線が一周する。

C: 口縁部は肥厚し、端部内面は凹線が一周する。

C: 口縁部はやや肥厚し、端部は丸味を帯び、その内面に面をつくる。

D類：底部は上げ底状に突起し、いわゆる「ヘソ皿」となる。体部、口縁部より二つに分類される。

D: 体部は直線的に立ち上がる。口縁部は肥厚し、端部は強いナデを施して突出する。端部内面には凹線が一周する。

D: 体部は直線的に立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は丸味を帯びる。

小皿

小皿は底部の形態よりE～Gに三分類される。皿に、体部、口縁部の形態から細分される。

E類：底部は平坦で、体部は逆「ハ」字形に開いて直線的に立ち上がる。体部、口縁部の形態から細分される。

E: 口縁部は内弯氣味に立ち上がり、端部は外方へやや屈曲する。

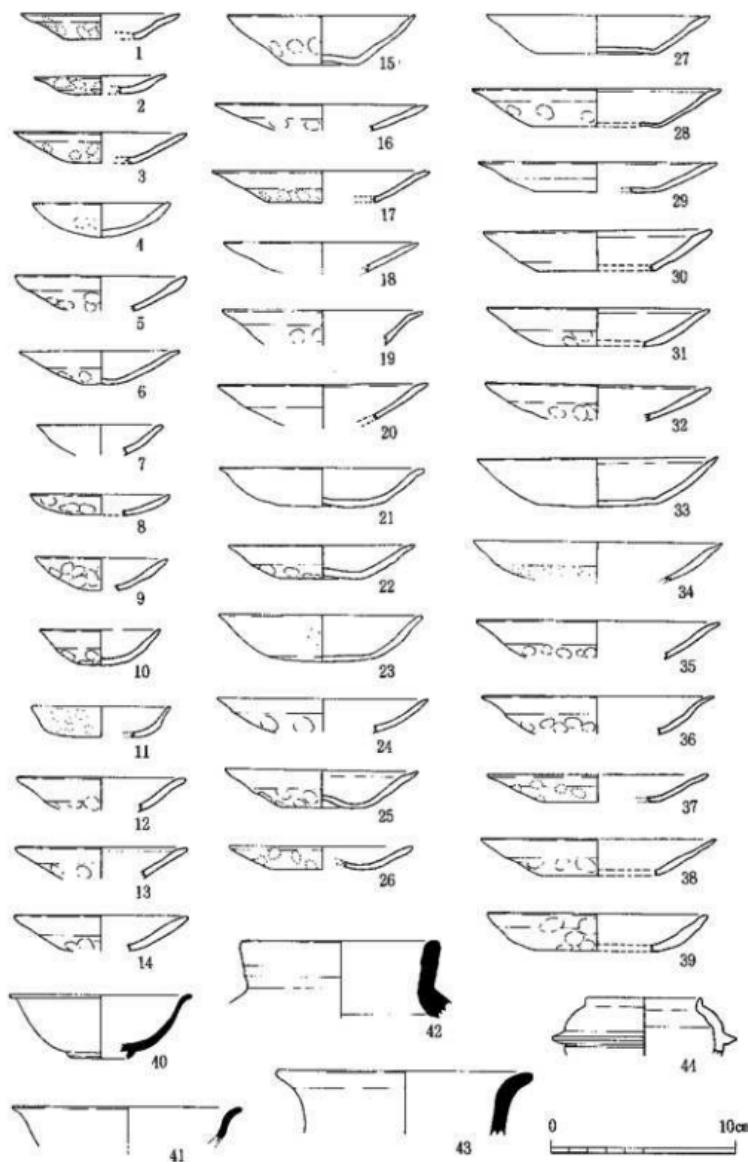
E: 口縁端部は肥厚し、内面に面をもつ。

E: 口縁端部は肥厚せず、内面に面をもつ。

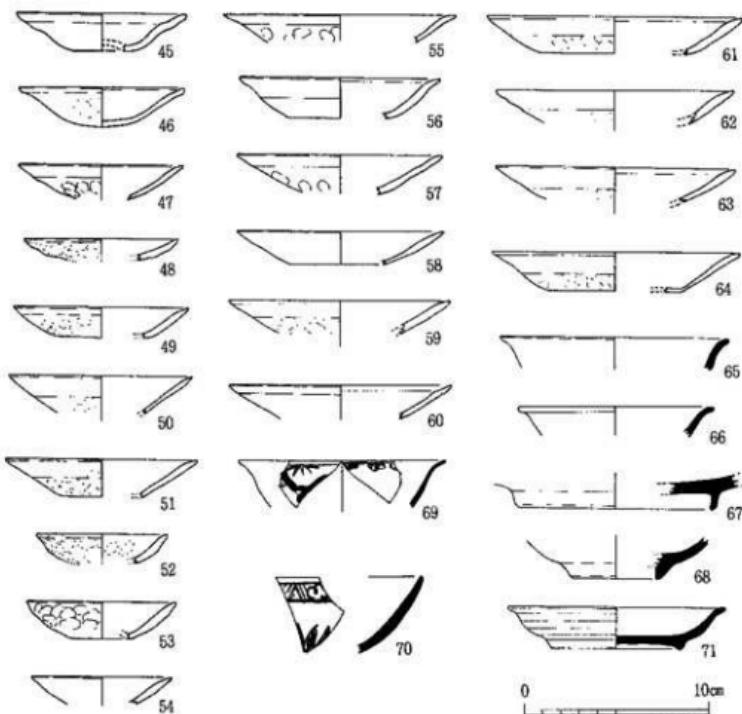
E: 口縁端部に強いナデが施され、内面は凹線状の構が一周する。

F類：底部は丸味を帯び、体部はやや内弯するため、体部と底部の境界は不明瞭となる。また、口縁端部は明確な面をもたない。

F: 体部に比して口縁部は著しく肥厚し、口縁端部は丸味を帯びる。



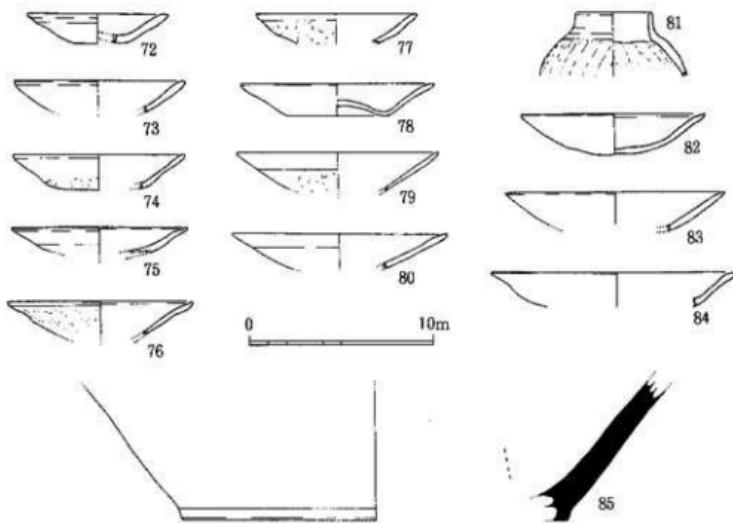
第10図 第2層出土遺物実測図



第11図 第3層出土遺物実測図

- F: 口縁部は外反し、端部はつまみ出して内方へ折り返す。
 - F: 口縁部は強いナデが施され、端部は外方へ屈曲する。
 - F: 口縁端部は丸みを帯びる。また、外面には指頭圧痕が明瞭に残る。
 - G類：底部内面が上げ底状に突出し、いわゆる「ヘソ皿」となる。体部、口縁部の形態より細分される。
 - G: 口縁部は極端に肥厚し、端部は丸味を帯びる。成形、調整とも粗雑である。
 - G: 直線的に立ち上がり、口縁端部内面は面をもつ。
 - G: 内寄しながら立ち上がり、口縁端部は強いナデにより外反する。
 - G: 体部は内寄して立ち上がり、口縁部は外方へ屈曲する。
- 以上、上師器皿の形態分類をおこなった。各形態が時期的な動向にどのように反映しているのか、良好な一括資料を欠く現時点では明らかにし難い。

2) 各層毎の遺物の検討



第2層

第12図 第4層出土遺物実測図

遺構面IIの上を覆う整地層で、出土遺物したものは土師器皿、瓦質羽釜、備前壺、壺、輸入陶磁器がある。

土師器皿をみると、大皿A類、中皿B類、C類、D類、小皿E類、F類、G類がある。大皿A類は、A₁ (21~31)、A₂ (32、33)、A₃ (34)、A₄ (35~37)、A₅ (39) で、A₁類が比較的多くみられる。A₅を除いて、全体的に外縁体部下半部にみられる指頭圧痕は不明瞭である。中皿はB₁ (15)、B₂ (16~18)、B₃ (19)、C₁ (20~23)、D₁ (24、25)、D₂ (26) がみられる。小皿はE₁ (1、2)、E₂ (3)、F₁ (4、5)、F₂ (6)、F₃ (7)、F₄ (8~10)、G₁ (12、13)、G₂ (4)、G₃ (11) と多様である。F類が比較的多い。

(42) は備前の壺口縁である。口径11cmほどの小型の壺である。(43) は備前焼の甕口縁である。口径14cmを測る。(44) は瓦質の羽釜である。口径6.2cm、体部の鉢外径は10cmを測るミニチュア製品である。(40、41) は中国産の陶磁器で、ともに白磁碗である。(40) は口径10cm器高3.4cmの小形のものである。高台部はやや内側に向く。体部は丸味を帯び、口縁部は外方へ屈曲する。釉は青味がかった不透明白色である。疊付は露胎する。(41) は口径12.8cmを測る。

第3層

第3層からは、土師器皿、備前すり鉢、古瀬戸系施釉陶器、輸入陶磁器が出土している。このうち、凶化したものは土師器皿、古瀬戸系施釉陶器、輸入陶磁器である。

上師器皿は大皿A類、中皿B類、C類、小皿E類、F類、G類である。大皿A類はA₁ (61~63)、A₂ (64)がある。このうち、(61)は口縁部外面に幅5mmの沈線がみられる。中皿B類はB₂ (55、56)、B₃ (57~59)がある。B₂、B₃とも体部下半部の指頭圧痕がやや明瞭に残る。中皿C類はC₁ (60)があり、口縁部外面に幅2mmの沈線がみられる。小皿E類はE₁ (50、51、51)、E₂ (49)がある。小皿F類はF₁ (46、47)、F₂ (48、52)がある。小皿G類はG₁ (53)、G₂ (45)がある。(45)は摩擦が著しく、体部の指頭圧痕を確認することができなかったが、爪痕が若干残っている。

(71)は古瀬戸系施釉陶器の折縁皿である。口径11.8cm、器高1.7cmを測る。釉はくすんだ透光緑色で、質入が著しい。外面の体部下半部の一部、豊付、高台内は露胎し、外面には釉垂れがみられる。(65~70)は中国製の輸入陶器である。(65~68)は白磁皿である。(65)は口径cm12.6cm、(66)は10.8cmを測る。共に口縁端部は外反する。(67)は白磁皿の底部である。高台は薄くやや高いものが付される。豊付は露胎する。(69、70)は背花碗である。(69)は口径11.4cmを測る。体部は内寄り、口縁端部は外方へ屈曲する。(70)は細片のため口径は復原できない。体部は内寄気味に立ち上がり、口縁端部はそのまま終わっている。外面下半部に粗雑な草花文が描かれている。質入が著しい。

第4層

庭園遺構を埋める上層であり、岡化できたものは上師器皿、上師器壺、備前焼がある。

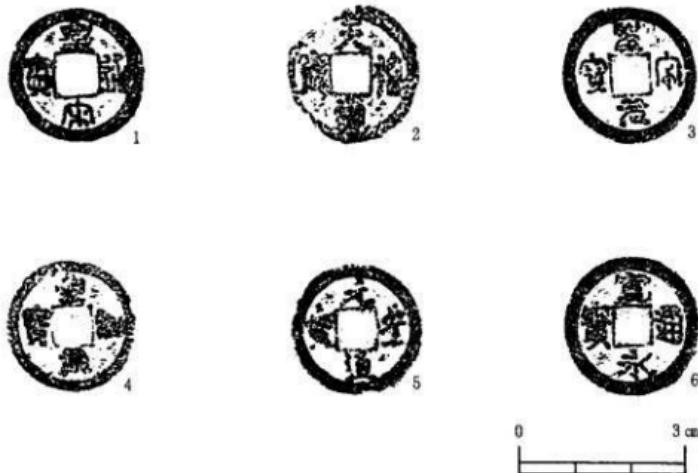
土師器皿は大皿A類、中皿B類、C類、D類、小皿E類、F類、G類がある。A類はA₁ (83)、A₂ (84)がある。B類はB₁ (79)、B₂ (80)がある。C₁ (82)は口縁部外面に沈線が見られる。D類はD₁ (78)がある。小皿はE₁ (73、74)、F₁ (75、76)、F₂ (77)、G₁ (72)がある。(76)は体部外面の指頭圧痕が明瞭に残る。土師器壺(81)は口径4.2cmを測る。体部下半を欠損するため、形態を窺うことはできない。口縁部はナデで、体部内外面は粗い縦方向のナデである。(85)は備前焼で、大甕の底部と思われる。底部径21cmを測り、外面はクロによるナデ、内面は粗雑なナデである。

銅錢

銅錢は第1層、第2層で出土している。(6)の第1層から出土した「寛永通宝」以外は北宋錢である。(1)は「皇宋通宝」、(2)は「天禧通宝」、(3)は「皇宋元寶」、(5)は「元豐通宝」である。(4)は摩擦のため判読し難いが、「皇宋通宝」の可能性がある。

今回の調査では、良好な一括資料に恵まれず、出土した遺物を基に型式を設定するには至らなかった。また、岡化できた資料も多くなく、第3層、第4層の上師器皿の傾向を十分に知ることはできなかった。但し、全体的に土師器皿は京都系の様相を呈していると考えられる。また、第3層出土遺物に関しては古瀬戸系施釉陶器は大窯1小窯(15世紀末頃)に比定されよう。

註1 繭井良祐「瀬戸大窯免税調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』1986年



第13図 銅銭拓影図

IV.まとめ

本年度の調査面積は260m²という限られた範囲であり、調査の目的が主として昭和43、44年調査の再確認であったが、主郭部の状況、あるいは池田城跡の構造を復原する上で幾つかの所見を得ることができた。また、出土遺物についても、良好な一括資料はないものの、主郭部以外の調査地と比べて格段の出土量であり、特に、池田城跡の廃城時期を示すと考えられる上師器皿の資料を得ることができた。ここで、検出遺構、出土遺物について若干検討し、まとめにかえたい。

検出遺構について まず、今回検出した遺構面についてみると、昭和43、44年の大阪教育大学の調査で検出された主殿と思われる建物群と同一面にあるのが、今回主として検出した遺構面Ⅱである。この中で特に、井戸に付随すると思われる建物跡は床面に円礎に敷かれ、その外側に小振りの礎石が配されることから、主殿と思われる総柱の建物群とは性格の異なるものと考え、井戸の存在を考慮して先に井戸に付属するものと推定した。しかしながら、円礎の床

面と建物の南側に見られる集石遺構（SX-1）が如何なる機能を有していたのか明らかにで
きておらず、建物の性格を具体的に言及できるまでには至っていないが、井戸とこの建物の検
出から、主郭部東側が張り出して土塁がコ字形に囲む状態となる箇所に主郭部の生活を維持す
る諸施設が配置されたものと推定される。また、遺構面IIを整地して遺構面Iの存在すること
を確認したが、非常に小規模な範囲ではあるものの遺構面IIでみられた建物跡はなく上杭と石組
遺構を検出したに過ぎず、全く様相を異にしている。これらの遺構に伴う出土遺物は微量であ
り時期を限定することは現状では困難であるが、上述した遺構面IIでみられた遺構との対比か
ら、遺構面Iは廃城直後を示している可能性がある。現段階では池田城跡の廃城過程や時期は
必ずしも明らかにされていないため、遺構面Iの状況をより具体化することは重要な意味をも
っているものと考える。

今回の調査で池田城跡の構造を復原する上で特に注目すべきものとして、後世に削平された
土塁を挙げることができる。現在、主郭部の上塁は東側の堀に沿って残存し、堀が大きく折れ
をもつ箇所から南側には見られない。堀が大きく折れをもつ箇所の対岸やや南には、昭和57年の
調査によって、堀が東方へ伸びその北側に沿って土塁の築かれていたことが判明しており、
この土塁と上述した堀の大きな折との間に主郭部の虎口が推定される。¹¹⁾今回判明した土塁の
痕跡は、堀の折まで現存する土塁が屈曲して西方へ伸びて主郭部内を走っていたことを物語る
ものであり、更に上述した虎口に対して横矢が効くため、虎口を構成する土塁であるものと推
定される。このことから、来年度はこの南側の調査を予定しており、あるいは虎口の形態が明
らかにできるものと考える。

最後に、上層と年代について若干触れておきたい。上述したように池田城跡主郭部において
確認した遺構面は、断面観察で5面を数える。そのうち最上面以外は火災に伴い地壊しや整地
がなされており、幾度もの落城と復興を繰り返した池田城の実態が遺構として良好に保存され
ていることが確認できた。池田城の落城と復興は文献にも記され、焼土や炭屑、あるいは整地
層と文献に記された年代とが対応できるものと考える。例えば、地山直上に見られる焼土あるいは
炭屑とこの上面に構築された庭園遺構については、文明元年（1469）の大内方の攻撃による
落城と池田氏の奪回、その後の文明19年（1487）の庭、倉に関する記載を矛盾せず、また、
庭園遺構を埋める第4層の整地を、永正5年（1508）落城の後に再度奪回した際の城の改修に
伴うものと推定することも可能ではある。しかし、第5層以下の出土遺物が明らかでない現段
階で文献と層位を結び付けるのは時期尚早であり、今回はその可能性を指摘するに止どめ、今
後の調査や出土遺物によって十分検討していかたい。

出土遺物について　出土した遺物の大半は土師器皿であり、施釉陶器あるいは輸入陶磁器は
小破片になったものが少量出土したに過ぎない。このことは、陶磁器のもつ耐久性にも関係し
ようが、池田城跡の廃城過程を示唆しているものと考えられる。池田城跡の廃城過程につ

いては必ずしも明らかにされていないが、外部からの攻撃による落城ではなく、荒木村重の有岡城入城を契機に廃城したとする説が有力であり、あるいはその際、当時貴重品であった施釉陶器や輸入陶磁器を持ち出したものと推定される。

比較的量のある上師器皿は、整地上から出土したため、異なる時期のものが混在し、編年作業をおこなう上でそのまま基準資料とすることはできないが、その見通しについて簡単に触れておきたい。

西摂地方における上師器皿の様相や編年については、資料数が少なく、明らかにされていないのが現状である。西摂地方における当該時期の良好な資料としては、豊中市總積遺跡第4次調査地点の15世紀末に比定される第1次遣構面西側斜面部土器群¹や、伊丹市有岡城跡SD-2下層出土の上器群²が挙げられる。これらの土器群と比べた場合、まず、本調査では總積遺跡と同時期のものはないが、次段階に位置付けられるものとして第4層出土の（72～74、78）が挙げられる。總積遺跡では外面の指頭圧痕が顕著で、また、歪みが著しいが、これらは外面の指頭圧痕が少なく歪みもられない。尚、總積遺跡では白色系土器が若干みられたが、第4層からは一点も出土していない。これに後出する資料としては、第3層出土の（45、46、49、50、55、57）が挙げられ、底部にみられるへこみが小さくなるか、丸くなっている。また、中皿は口縁部がやや直線的に外反し、器壁も厚くなる。この次の段階としては第2層出土遺物の中で新しい様相をもつもの（3、6、16、17、27～38）が挙げられる。何れも口縁部が第3層のものと比べてより直線的となり、器壁も薄くなっている。有岡城跡SD-2下層のものと比べると、口縁部の類似するものもあるが、小皿、中皿では口縁部から底部への丸味がなく、大皿では器高が若干高いという違いがみられ、これらは、池田城跡の方が先行する特徴を示していると考えられる。

以上、大雑把に述べてみたが、上述したように、本調査では混在した資料であり、型式的な特徴や、使用時の組み合わせなど、検討すべき課題が多く残されている。

註1 奈良女子大学 村田修三氏に御教示いただいた。

註2 豊中市教育委員会「總積遺跡現地説明会資料」1985年

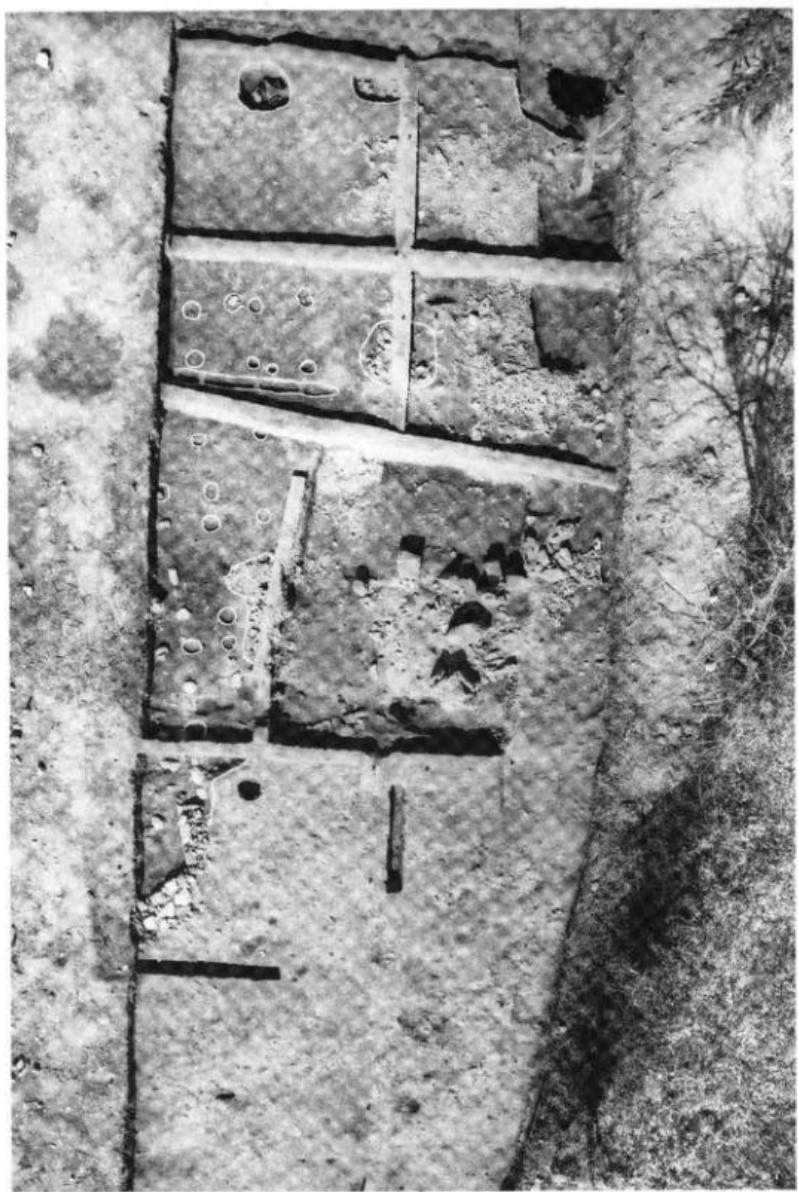
註3 大手前女子大学有岡城跡調査委員会「有岡城跡・伊丹郷町I」1987年



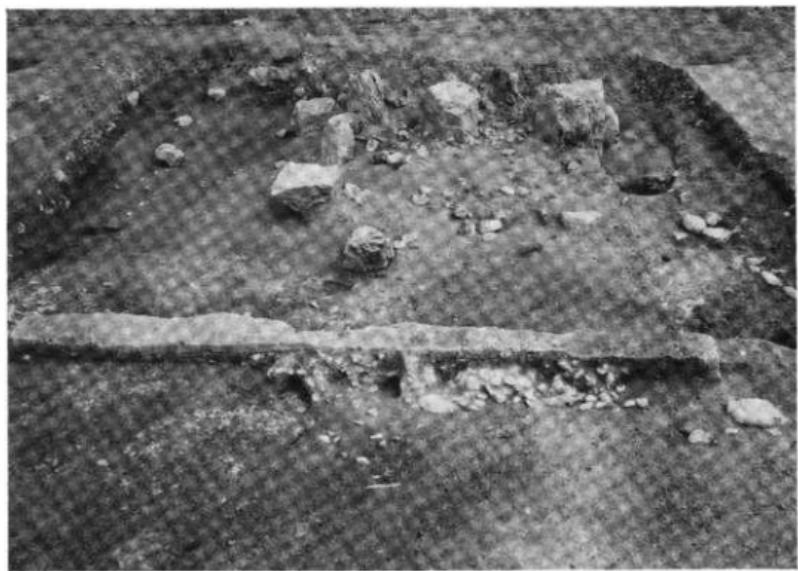
(1) 主郭部遠景（西上空から）



(2) 調査前の状況



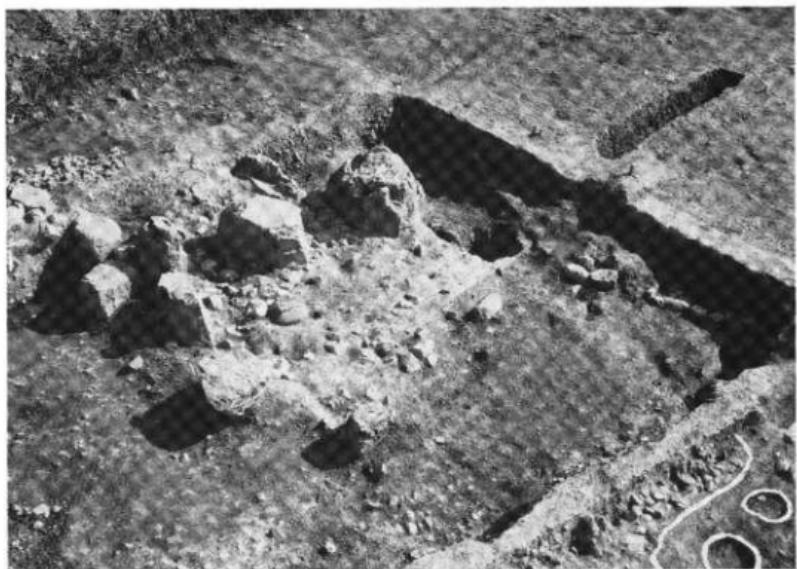
調査地全景



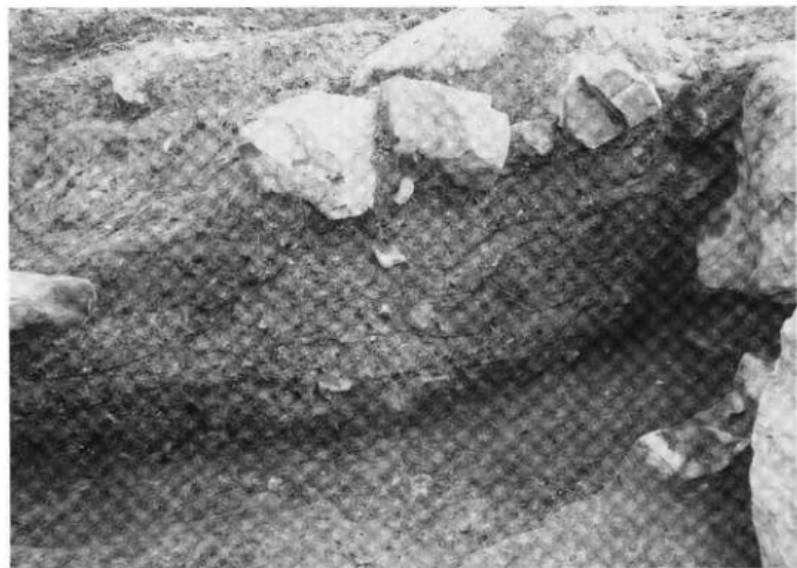
(3) 庭園遺構（西から）



(4) 同上（西北部から）



(1) 庭園遺構（西北斜め上から）



(2) 庭園遺構背後の土層断面



(1) 庭園造構に伴う土壘下石列



(2) 建物1及び石列（南から）



(1) 石列（西から）



(2) 碑敷面（北から）

池田市文化財調査報告第10集

池田城跡

—主郭部発掘調査概要報告1—

1990年 3月

発行 池田市教育委員会

池田市城南1-1-1

編集 社会教育課 文化財係

印刷 西村印刷株式会社